

香霖堂の 社会思想ゼミ

—市民のための「社会」をめぐる思想講座—



香雪林堂の社会思想ゼミ

市民のための「社会」をめぐる思想講座

発行：2014年3月30日（第8回東方名華祭・幻想郷フォーラム2014）

著：後藤和智（後藤和智事務所 Office Line）／表紙イラスト：Kch（慶雲興）

注意

1. 本書は、同人サークル「上海アリス幻楽団」の作品「東方Project」の二次創作作品です。本書は東方Projectの二次創作ガイドラインに従って製作されているものであり、また著者と原作者及び作者のサークルとは一切関係がありません。そのほか、登場人物の口調などが原作と異なる場合があります。
2. 本書を著作権法の定める私的使用の範囲外で公開などを行うことを禁じます。また、本書の使用により生じた問題についての責任は負いかねます。

はじめに

森近霖之助^{もりみけのすけ}

（以下、霖之助）：「後藤和智事務所 Office Line」38冊目の同人誌を手にとってくれてありがとうございます。本書は魔理沙が僕の店の奥で開催する、社会思想に関する幻想郷の各勢力の代表者による発表会を記録するものであると共に、読者の皆様にも社会をめぐる思想や哲学に対して理解を深めてもらいたいと解説書として書かれたものだ。その目論見については魔理沙から追々説明があると思うが、本書を通じて、読者の皆様にも自分と社会、あるいは他者などとの関わり、そして参加のあり方について考え直してくれると幸いだ。僕はあとから彼女らに合流する。そういうわけで、本文中でまた会おう。

霧雨魔理沙（以下、魔理沙）：よし、私が呼んだ連中は全員揃ったようだな。まずは自己紹介からいこうか。といっても既に会ったことのある奴もいるだろうが、そこはある種の儀礼とか儀式だとかだと思って大目に見てくれ。

上白沢慧音（以下、慧音）：人里で寺子屋を開き、また歴史家としても調査・研究を進めている上白沢慧音と申します。このたびこちらにいる魔理沙の計らいで、幻想郷の各勢力の方々による社会思想に関する発表を通して、改めてこの幻想郷の社会のこれからについて学ぶことができるという機会を得ることができて、光栄に思っております。

ニッ岩マミズウ（以下、マミズウ）：最近幻想郷に越してきた佐渡の団三郎狸、ニッ岩マミズウじゃ。今は命運寺に住まわせてもらっているので、命運寺の代表としてここに出席させていただいておる。詳細は明がせんが、たまに人里にも出ているので、そちらのハクタクの歴史家とはもしかしたら会ったこともあるかもしれないな。

豊聡耳神子（以下、神子）：太子廟の代表として出席いたします、豊聡耳神子と申します。私もそちらの命運寺の方に近い時期に幻想郷に越して参りました。かつては幻想郷における道教の勢力拡大を目論んでいましたが、今は腰を落ち着けております。

古明地さとり（以下、さとり）：地霊殿を代表して出席します、古明地さとりです。地底の妖怪たちは地上に出ることはあまりないのですが、このように地上の有力者たちとの交流を深めることも必要かと思ひ参加した所存です。

魔理沙：紹介が終わったな。というわけで形式的なものはここで終わりにして、出席者の方々には肩の力をほぐして参加してほしい。

慧音：しかし魔理沙、またこういう風にして幻想郷の各勢力が揃って勉強会という、前にさとりさんから自己の社会学を学んだときに（『古明地さとの自己形成論議』後藤和智事務所Offline、2013年（第10回博麗神社例大祭）、霊夢が説教に殴り込みに来たりしないのだろうか？

魔理沙：今回はちゃんと霊夢に話はつけてあるぜ。開催場所を香霖堂にしたこともあいつが今回の件を認めてくれた要件でもある。ただ条件として、博麗神社の側からも出席者兼監視役を派遣することが提示されたぜ。

マミズウ：博麗神社側の参加者と言うが、そんな人影はどこにもおらんぞ。この店主がそれと言うのか？

さとり：店主さんではないようですね。しかし生き残りが存在していたとは…。

魔理沙：さとり、いくら心を読めるからと言って、ネタバレになるようなことを言うのはそこまでしておいてくれ。まあそんなにもったいぶる必要もないかな。じゃあ、そろそろ出そうか。

少名針妙丸（以下、針妙丸）：はじめまして！ あたし、少名針妙丸っていいますっ！ 博麗神社の代表として参りました。少し前の異変で幻想郷のみなさんにご迷惑をかけてしまったんですけど、今回魔理沙さんからの勉強会のお話を聞いて、社会のことかいろいろ勉強してみたいと思います。参加してみることになりました。

さとり：はじめまして。魔理沙の靴から何か心の声が聞こえて不思議に思っていたのですが、あなたでしたか。

慧音：はじめまして。この前新聞で見た小人の末裔とはあなたのことだったんですね。

針妙丸：ありがとございます！ 前の異変では、正邪さんの口車に載せられていたとはいえ、あたし自身もいろいろと軽率なところがあつたと思うんで、頑張って学びたいと思います。

魔理沙：まあそんなもんだ。霊夢もこれにはいろいろ学んでほしいと言っていたからな。あと、これに接する態度も別に町中の人に接するよつな

のでいっせ。

マミゾウ…さて、これで全員か。それでは魔理沙よ、今回の勉強会の目論見を説明してくれんか。

魔理沙…ああ。では、本書の概要の説明に入るぜ。本書は哲学や社会学、政治学などの分野において「社会」や「政治」などについて、どのような思想が展開されてきたかについて、ここにいる5人の発表者に、それぞれ1人の思想家・学者をピックアップして説明してもらう、というものだ。内容も、社会をめぐる法や経済などのシステムや、あるいは統計的に観測しうる思考や感情というよりも、根源的な話題となる。幻想郷において様々な勢力が台頭している中、思想的な問題を改めて整理することにより、今後の社会の行方について各勢力の有力者に考えを深めてもらう、というのがこの勉強会の目論見だ。そして読者の皆様にも、アドホックな正当性に依拠し、他者や他の社会階層・集団との利害調整を無視した「正義」があふれる中において、自分そして他者の考えをどのように位置づけ、そして社会に対して有益なものを生み出していくかにとって必要なものを、私たちの発表を通じて改めて考えてほしい、と本書の著者は思っている。以前本書の著者が出して、そのときはさとりが講師となった『古明地さとの自己形成論講義』が自己と社会をめぐる社会学や心理学だったが、今回は社会的な存在としての人間の活動に焦点を当てた思想について解説することとなるが、社会の思想をめぐる議論の整理は、本書の版元サークルのメインジャンルである評論、特に若者論をはじめ、社会をめぐる言説の布置を行うことや、各種試験・入試の論文試験にも役立つものだ。

慧音…確かに「思想」というものは、知っておいてすぐさま使えるというものではないな。しかし、表面上は難解な思想など無縁な文章であっても、それが何らかの思想性を帯びていることは少なからずあるわけで、それをどのように社会の現状と結びつけていくかということを考える上では、思想的なこと欠かすことはできないだろう。

さとり…本書の目論見の解説は以上のようなようですね。

魔理沙…発表者と内容は次の通りだ。第1章が慧音先生で、題材はハンナ・アレント。主に公共性などの概念についての話になるだろう。第2章は神子で、題材はカール・シュミット。法哲学者だが、内容は「政治」がどういふものかということになるだろうな。第3章は針妙丸で、題材はジョン・ロールズ。社会における「正義」や「公平性」を、リベラリズムという視点からどう定義するかという話になる。第4章はマミゾウで、題材はエドモンド・バークを中心に、「保守主義」についての解説になる。最後、第5章はさとりで、題材はピエール・ブルデュー、社会階層についての講座となるかな。マミゾウ…各自テーマを持ち寄って発表し、また他の参加者とも意見を交換することで、参加者の見識も深まることが期待されそうじゃな。

針妙丸…皆さんからどんなお話が聞けるのか、あたしも楽しみですよ！

魔理沙…それじゃ、始めるとしようか。

香霖堂の社会思想ゼミ - 目次

はじめに.....	2
第1章 ハンナ・アレント / 公共性 (発表者…上白沢慧音)	6
1.1 はじめに	7
1.2 全体主義研究のアレント	8
1.3 『人間の条件』——「公的領域」の喪失は何をもたらしたか	11
1.4 アレントにおける「労働」と「仕事」	14
1.5 『革命について』	16
1.6 まとめ	
第2章 カール・シュミット / 決断主義 (発表者…豊聡耳神子)	18
2.1 はじめに	19
2.2 『政治的ロマン主義』	22
2.3 「決定(決断)主義」とは何か? ——『政治神学』	24
2.4 政治・社会における対立とは——『政治的なものの概念』	24
2.5 まとめ	
第3章 ジョン・ロールズ / リベラリズム (発表者…少名針妙丸)	26
3.1 はじめに	26
3.2 社会契約論とリベラリズムの形成	29
3.3 「原初状態」	30
3.4 第一原理 (平等原理)	32
3.5 第二原理 (格差原理)	34
3.6 格差原理をめぐる議論と批判	38
3.7 まとめ	
第4章 エドモンド・バーク / 保守主義 (発表者…ニッ岩マミソウ)	40
4.1 はじめに	40
4.2 保守主義とはなにか	42
4.3 『フランス革命についての省察』	46
4.4 バーク保守主義の経済学への展開	47
4.5 まとめ	
第5章 ピエール・ブルデュー / 文化資本 (発表者…古明地さとり)	50
5.1 はじめに	50
5.2 『遺産相続者たち』——社会階層論	54
5.3 「知識人」とは何か	56
5.4 まとめ	
エピローグ / ブックガイド / あとがき	58
エピローグ	59
ブックガイド	60
あとがき	

第1章

ハンナ・アレント —公共性—

(発表者：上白沢慧音)

1.1 はじめに

霖之助：準備は整ったかい？ しかし魔理沙、君がこのような社会思想に関する勉強会を主宰すると聞いて、まあ確かに君がそういう突飛なことをすること自体は不思議とは思わないが、それが思想となればどうという風の吹き回しかとも疑いたくもなるな。

魔理沙：まあ、この前の異変とかもあって、ここにいる針妙丸にもいろいろ学ばせてやりたいと思ったこともあるし、他にも幻想郷のいろいろな勢力の奴らが一堂に会して交流を持つ機会を作ることによって各勢力の暴走を抑える役割などもあると思うているしな。

針妙丸：あたしもいろいろな考えに触れてもっと世界を理解したいと思ってますし、感謝してますよ。

霖之助：それはいい心意気だと思う。まあそういうわけ

で、早速セッションに入るとしようか。最初は誰が担当するんだい？

魔理沙：最初は慧音先生だ。というわけで、よろしく頼むぜ。

慧音：わかった。：それでは、解説に入りたいと思います。私がこれから挙げるのは、ハンナ・アレント（注1・1）というユダヤ人の政治思想家です。彼女は元々はドイツで、『存在と時間』のハイデガー（注1・2）や、『精神病理学原論』のヤスパーズ（注1・3）に学びましたが、ナチス政権下のドイツでのユダヤ人迫害を逃れて、フランスを経てアメリカに亡命し、アメリカで『全体主義の起源』などの政治思想の書物を著して有名になりました。アレントの思想の形成の特徴には、彼女がドイツで学んだ実存哲学や現象学といった哲学と、当時のもう一つの思想的な潮流であったマルクス主義というものが、そしてユダヤ人としての自覚が背景にあると指摘され

ています（注1・4）。

さとり：アメリカに亡命したドイツ人にとって、アメリカにとどまるかそれともドイツに帰るかというのは重大な選択であり、さらに思想家という立場なら、ドイツが生み出したナチズムというものの対処・言語化を行わなければならないというものもあったかと思います。またアメリカに亡命したドイツの文学者や哲学者の中にも、例えばアドルノ（注1・5）などのようにドイツに帰った方もいますが、ドイツから亡命した思想家、という数奇な人生を送ったアレントは、何度か映画の題材にもなっていますね。

魔理沙：アレントの代表的な著作である『イエルサレムのアイヒマン』を題材にした映画「スベシヤリスト

——目覚なき殺戮者」（注1・6）は1999年のベルリン国際映画祭での招待作品になったし、なんとこの映画はイスラエルでもテレビで放映されたそうだ（注1・7）。近年もアレントそのものを題材にした「ハンナ・アレント」（注1・8）が話題になっているよな。

霖之助：それだけではなく、アレントは1980年代以降では思想の面で再注目されている。それはあらゆるところで政治文化の衰退が叫ばれる中で、「公共性の復権」が提起されるようになったということもあるな（注1・9）。

1.2 全体主義研究のアレント

慧音：先ほど魔理沙が挙げた『イエルサレムのアイヒマン』や、アレントの代表的な著作である『全体主義の起源』などは、全体主義の構造の解明としてアメ

- 注 1.1 Hannah Arendt 1906-1975 哲学者、思想家。著書に『全体主義の起源』『人間の条件』など。詳しくは本章参照。
- 注 1.2 マルティン・ハイデガー Martin Heidegger 1889-1996 哲学者。1933 年 4 月にフライブルク大学の学長の就任と共にナチスに入党したが、1934 年に学内の事情で引責辞任。著書に『存在と時間』など。
- 注 1.3 カール・ヤスパーズ Karl Jaspers 1883-1969 精神科医、哲学者。実存主義の代表的な哲学者として知られる。著書に『歴史の起原と目標』『精神病理学原論』など。
- 注 1.4 川崎修『アレント——公共性の復権（現代思想の冒険者たち Select）』（講談社、2005 年）pp.14-17
- 注 1.5 テオドル・アドルノ Theodor Ludwig Adorno-Wiesengrund 1903-1969 哲学者、作曲家。フランクフルト学派第 1 世代の代表的存在で、権威主義的パーソナリティの指標の開発者。著書に『否定弁証法』『啓蒙の弁証法』（マックス・ホルクハイマーとの共著）など。
- 注 1.6 1999 年、エイアル・シヴァン：監督。1995 年に発見された、アドルフ・アイヒマンの未公開の記録テープを、アレントの『イエルサレムのアイヒマン』をもとにドキュメンタリーとして再編集した作品。
- 注 1.7 矢野久美子「アレントと「アメリカ」の戦後」（『ハンナ・アレントを読む』pp.22-34、情況出版、2001 年）
- 注 1.8 2012 年、マルガレーテ・フォン・トロッタ：監督。アレントの人生を描いた伝記的映画。また、本編中にアドルフ・アイヒマンの裁判記録映像が使われている。
- 注 1.9 石井伸男「ハンナ・アレントとマルクス——「労働」と「仕事」の区別をめぐる」（『高崎経済大学論集』第 40 号、pp.111-134、1997 年）p.112
- 注 1.10 飯島昇蔵「ハンナ・アレントと公的自由」（『早稲田大学政治経済学雑誌』第 256 号、pp.54-89、1987 年）p.57
- 注 1.11 川崎『アレント』p.46
- 注 1.12 川崎『アレント』pp.49-50
- 注 1.13 生物の遺伝の構造を改良することにより社会を改善しようとする運動。実現性を示す研究はあるものの、かつてナチス政権の人種差別政策に使われていたこともあり、倫理的問題が問われている。
- 注 1.14 川崎『アレント』pp.82-89

リカで話題になり、現在もアメリカの哲学におけるアレントの影響は大きいと言ってもいいでしょう。ただ、『全体主義の起源』は主に 19 世紀の政治秩序の解体が主目的であり、20 世紀のファシズムに触れた部分はあまり多くありません。今回の発表では、1958 年に発表された『人間の条件』を中心に、アレントの社会や政治に関する思想を採り上げていくため、全体主義関係の話は概要をもって解説に代えることをお許しください。アレントは全体主義研究に際し、全体主義や反ユダヤ主義を制限・抑制すると共に、人間の尊厳のためにそれらの抑制の妥当性があるとしています（注 1・10）。

霧之助…そういう態度が、後のアレントの積極的な活動に見られるような政治原理の問い直しに繋がるわけ

だぬ。

慧音…さて、先ほども述べたとおり、1951 年に刊行され、全体主義研究の古典として読み継がれている『全体主義の起源』の主目的は 19 世紀の政治秩序の解体であり、アレントが述べていたのは国民国家や代議制の脆弱さでした（注 1・11）。アレントはネーション（国民）について、それは歴史的・文化的な統一体としての自己意識によって裏付けられると述べています。そしてこの「ナショナルな帰属」と国家機構が一体化して誕生したのが「国民国家」、ネーションステートというように説明されています（注 1・12）。

針妙丸…えっと、ネーションってのが「国民」だとすると、ナショナリズムっていうのは「国民主義」ってなりますよね。それは「民族主義」とか「人種主

義」とかは違うんでしょうか？

慧音…アレントにおいては、ネーションないしナショナルなものと、人種主義的なものは対立したものと捉えられるものだ。そして人種主義と官僚制が、帝国主義を特徴付ける支配の形態であると説明される。ネーションという観念は、共同体に所属する成員は本質的に平等と捉えるが、人種主義は共同体の内部における格差や差別を正当化するための論理だ。優生学（注 1・13）などがその代表例だろうが、人種主義は、ネーション概念のように、共同体的、歴史的なものではなく、単に生物学的特徴を共同体の基礎とするところに生じるものということになる（注 1・14）。

魔理沙…最近の研究では、排外主義的な傾向に対して影響を及ぼしているのはナショナリズムではないとい

うことが実証的に示されてもいる。例えば日本におけるある研究では、日本人が文化や科学、スポーツで何か偉大なことを成し遂げることや、あるいは民主主義、経済、防衛などと言った体制などといったナショナルなものに対する誇りは、排外主義的傾向をむしろ減少させる。逆に増加させるのはパトリオティズムで、「日本」そのものへの誇りということが言えそうなんだ(注1・15)。

神子・人種主義と官僚制と言いますが、人種主義は先ほどの説明でいいとして、官僚制はどのような形態のことを指すのでしょうか。

慧音・アレントの言う官僚制とは、政令による支配のことを指します。そして法律が永続的な政体、共同体を築こうとするのに対し、政令による支配はそのような安定したものを退けます。詳しい説明は省略しますが、植民地において相応しい支配を、本国の法律などの制約を受けない形でこのような官僚制が成長したと言われています(注1・16)。アレントにとって、19世紀の帝国主義とは、ヨーロッパ諸国による「膨張のための膨張」「権力のための権力の無限追求」を目指したことと捉えられますので、人種イデオロギーに基づく膨張政策と官僚制が帝国主義を特徴付ける、としたわけですね。また、政治ではなく社会について、アレントは『全体主義の起源』で、階級社会の解体について論じています。

さとり・階級社会というと、それまでは貴族的な特権によって社会への参画が決められていた、ということになるのですね。それが資本主義の進展によって経済的・文化的価値を得ることによって社会への参画ができるようになり、結果として社会を基礎づけていた倫理的基盤が喪失した、ということですかね。

慧音・大筋で説明するとそうなるだろう。そして第一次世界大戦によって19世紀的な社会が終わり、大衆的な政治運動が登場したということになる。…さて、

「ここで『大衆』という表現を使いましたが、大まかに説明すると、『大衆』とはそれまでの階級を構成する小集団などのように利害を共有するものとは違い、特定の目標を達成する意識を持たず、組織化を欠いた集団を指します。これは古今東西の様々な社会に存在しますが、第一次世界大戦後のヨーロッパでは、階級社会の崩壊による政党の力の喪失と、大衆を政治化する全体主義運動の伸張が起こったことが特徴的だとされます(注1・17)。

さとり・アレントの言う「大衆」が一定の文化的基盤や社会的志向性を持たないとすると、「大衆」を組織化するための運動は必然的に文化や秩序を生み出すものではなく、むしろそれを破壊するものになりそうですね。そして階級社会の解体によって既存の価値観が失われたとなると、大衆を扇動するためにはそういう価値観に対してシニカルな態度をとることが必要となる。

慧音・「大衆」や「運動」はアレントの全体主義論でも重要となる概念だが、ここでは深入りするのは控えておこう。

1.3 『人間の条件』

——「公的領域」の喪失は何をもたらしたか

慧音・次に、アレントの『人間の条件』で描かれている

社会について見ていこうと思います。『人間の条件』は1958年に刊行されました。同書が当時の思想や哲学にとつて衝撃が大きかったのは、「公共性」を改めて問い直したところにあります。アレントが同書で示していることは、現代の危機として、「公的領域」が失われ、「私的領域」が拡大したこと、そして「社会的なるもの」が勃興したことを挙げています。

針妙丸・「社会的なるもの」という表現が興味深いです。それは後で詳しく解説されることになるのでしよけど、「公的」と「私的」というのは、あとであたしが発表するリベラリズムにも深く関わってきますね。

慧音・アレントの言う「公的」「私的」について説明すると、まず「公的」というものは、《公に現れるものはすべて、万人によって見られ、開かれ、可能な限り最も広く公示される》(注1・18)という、他の人に見られたり聞かれるものという意味と、《世界そのもの》(注1・19)の2つの意味を持っているとされる。ここで言う「世界」とは、アレントが自然だけではなく《人間の工作物や人間の手で作った製作物に結びついており、さらに、この人工的な世界に共生している人びとの間で進行する事象に結びついている》(注1・20)と述べていることから、複数の人々の間で進行することが「世界」ということになる、というわけだ(注1・21)。そしてこの「世界」は、人々を結びつけると同時に、人々を分離させるものでもある。そして本文中でも何回か言及されているように、アレントはこの「公的(領域)」や公共性の原点を、ギリシャの都市国家(ポリス)に見出している。

神子・アレントの「公的（領域）」観に従えば、『全体主義の起源』で述べたような大衆運動の隆盛は、その「世界」が人々を関係させる力の喪失によるものである、という説明ができそうです。また、「世界」が続くということに対して信頼が失われ、「世界は永続しないものだ」ということを確認するために、世界のことを消費しようとする動きが生まれる、というように説明されるものかと思います。

慧音…その通りです。公的空間は、人間の一生を超え、潜在的に死ぬことはないものと確信される必要があります。また私が針妙丸さんに対して述べたように、公的空間の一つの意味として、そこに集う一人一人が違う立場からものを耳聞きしていることの確証が必要となります。従って、公的領域は、多くの側面を持ったものの中に見出されることとなります。逆に、公的領域の中に画一主義が出てくるようになります。公的領域は必然と解体されることになり、全体主義の起源でも、社交界に対してその参画方法に新たなものが生まれたことから、画一主義が生まれ、そこに退屈した人々たちによって新奇性そのものを追い求めるような傾向が生まれたと指摘されていましたが（注1・22）、それを公的領域の特徴を使って、次のように言い換えていることとなります。

共通世界の条件のもとで、リアリティを保障するのは、世界を構成する人びとすべての「共通の本性」ではなく、むしろなによりもまず、立場の相違やそれに伴う多様な遠近法の相違にもかかわらず、すべての人がいつも同一の対象に関わっているという事実である。しかし、対象が同一であるということが

もはや認められないとき、あるいは、大衆社会に不自然な画一主義が現われるとき、共通世界はどうなるだろうか。そのような場合には、人びとの共通の本性をもってしても、共通世界の解体は避けられない。この場合、普通、共通世界の解体に先立って、共通世界が多数の人びとに示す多くの側面が解体する。（注1・23）

マミゾウ・アレントが「公的」ないし「公的領域」という言葉にそういった特徴を与えているということとは、「私的」というものは、そういった多様性を排除したもの、ということになるのだろうか？

慧音 アレントは、「公的領域」に関する説明の延長上で、先の引用文に加えて、「私的」なものに対して次のような説明を与えています。

こういうことは、普通、暴政の場合に見られるように、すべての人がもはや自分以外の人と同意できないほど根本的に孤立している場合に起こる。しかし、それは、大衆社会や大衆ヒステリーの場合にも起こりうるものであって、その場合には、すべての人が、突然、まるで一家族のメンバーであるかのように行動し、それぞれ自分の隣人の遠近法を拡張したり、拡大したりする。この二つの事例において、人びとは完全に私的になる。つまり、彼らは他人を見聞きすることを奪われ、他人から見聞きされることを奪われる。そして、この経験は、たとえそれが無限倍に拡張されても単数であることに変わりはない。共通世界の終わりは、それがただ一つの側面のもとで見られ、たった一つの遠近法において会われるとき、やつてくるのである。（注1・24）

慧音…これが意味することは、私的領域というのは、

公的領域を規定する要因である多様な他者の存在や結びつきが奪われた場所と言うことができます。「私的」を意味する private という言葉は、元々はラテン語の privare（奪つ）を語源としており（注1・25）、関連する語句として「欠乏」という意味を持つ privation、privative があります。そしてアレントは privative の意味を踏まえつつ、「私的」な生活には人間的な生活が奪われているものとしています。

針妙丸…あれっ？ 慧音先生はアレントが現代の危機について「社会的なるもの」の勃興を挙げているって言うてましたけど、「私的（領域）」と「社会的なるもの」ってどういう関係があるんですか？

- 注 1.15 金明秀「日本国民のナショナル・アイデンティティと排外主義に関する計量社会学的検討」<http://han.org/a/JSS84.doc>、初出 2011 年
- 注 1.16 川崎『アレント』pp.88-91
- 注 1.16 川崎『アレント』pp.88-91
- 注 1.17 川崎『アレント』pp.144-154
- 注 1.18 ハンナ・アレント『人間の条件』（志水速雄：訳、ちくま学芸文庫、1994 年）p.75
- 注 1.19 アレント『人間の条件』p.78
- 注 1.20 アレント『人間の条件』p.78
- 注 1.21 小玉重夫『難民と市民の間で——ハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す』（現代書館、2013 年）pp.38-40
- 注 1.22 川崎『アレント』p.134
- 注 1.23 アレント『人間の条件』p.86
- 注 1.24 アレント『人間の条件』pp.86-87
- 注 1.25 スペースアルク「語源辞典」を参照した。http://home.alc.co.jp/db/owa/etm_sch

慧音：「社会的なるもの」と「私的領域」は、もちろんアレントの中で深く結びついているものだが、その前に「私的領域」についてももう少し詳しく説明することから、もう少し待ってほしい。

針妙丸：はい。

慧音：さて、「公的領域」が様々な人が集い、様々な側面を持つ世界であるのに対し、「私的領域」とは基本的に家庭や家計といった個々人の生存を保障するものとなります。そして伝統的な考えでは、公的な生活に加わるためには、生命が必要とするものを得る私生活の充実がなされる必要があります。私的領域の充実によって、公的活動力の自由が保障されると考えます。その点において、公的領域と私的領域の関係は、共存的な緊張関係と言えるでしょう（注1・26）。そしてこれによって共通世界が誕生したのが古代ギリシャのポリスであり、「公的領域」はそれに端を発しています。

霖之助：「私的領域」というものは親密なものを保護するためのもの、だという認識といつわけな。さて、「公的領域」と「社会的なるもの」の違いについては、どういふことになるのだろうか？

慧音：私的領域が著しく豊かになった近代においては、私的領域は政治的意識よりも、社会的意識と対立しているということが見出されます。アレントの言う「社会」とは、《いつでも、その成員がたった一つの意見と一つの利害しかもたないような単一の巨大家族の成員であるかのように振る舞うよう要求する》（注1・27）ものと捉えられます。家族での画一化の支配は「一人支配（ワンマン・ルール）」ですが、社会での画一化の支配は「無人支配（ノーマン・ルール）」となります。

マミゾウ：『全体主義の起源』で、階級社会の解体の特徴として述べられていた画一化の概念が、ここにも現れているようだ。そして「無人支配」は官僚制に対応するものだろう。

慧音：アレントはこの無人支配の特徴について、ヨーロッパの上流階級のサロンを例にとって説明しています。アレントに曰く、《上流社会の因襲によれば、個人は、常に社会的枠組みの中で決められたその人の身分にふさわしいものでなければならぬ》（注1・28）。ここで問題視されるのは、その社会的枠組みではなく、社会に所属する人はその社会的地位に相応しいものでなければならぬという態度です。そしてこの「社会的なるもの」は大衆社会の広がりと共に大きく拡大しました。

霖之助：それは、ある側面では平等が達成されたと言いうことができるかな。

慧音：アレントが《現代世界で平等が勝利したというのは、社会が公的領域を征服し、その結果、区別と差異が個人の私的問題になったという事実を政治的、法的に承認したということにすぎない》（注1・29）と述べるように、近現代の「平等」とは画一主義的な平等ということになります。古代の都市国家のように公的領域が機能していた時代の平等については、公的生活のために自分と他人を区別する必要があり、そのため公的領域は個性を示すためのもので、それがあつてこそ人々は自らの政治的役割を引き受けていた、という平等とは明らかに対置されています。閑話休題、大衆社会の広がり、それまで私的領域だった家族や家計の行動力が、社会を通じて公的領域に入り込んでくることを意味しました。針妙丸：そっか。「社会的なるもの」と私的領域ってそ

ういう風にして繋がるんですね。

慧音：変わったのは決して私的領域の性質ではないんだ。個々人の生存や種の保存を目的とする私生活や私的領域という性質は変わってはいない。ただ、私的領域が拡大し、社会領域が生命活動そのものの公的な組織となると、人々の活動のあり方が変化したと言えるのだ。

魔理沙：アレントの概念で有名な「労働」「仕事」「活動」の内、「労働」が肥大化した、っていう説明だな。

針妙丸：え!? 「労働」と「仕事」ってアレントは違う概念として捉えているんですか？

慧音：そっか。これについてはまたあとで採り上げることにして。今は、「労働」とは私的領域に属する、すなわち成員の生存に関わるもので、「仕事」とは公的な世界性に関わるものだ、ということを書いておくにとどめよう。

さとり：一方でアレントは、「社会的なるもの」の拡大は、私有財産のあり方の変化とも結びついていると述べているようですね？

慧音：これもアレントの「私的領域」と「公的領域」、そして「社会領域」のあり方の変化が関わってくるものだ。公的領域が解体されていなかった頃の私有財産はただ私的なものであったが、公的領域が社会に解体されると、私有財産はむしろ公的なものとなり、場所によって決定される私的な価値を失って、貨幣的な交換率によって決定されるような公的な価値を持つようになった、と説明されている。そうすると、唯一頼ることができる自分の財産とは、身体及び労働力そのもの、ということになる（注1・30）。魔理沙：ここまで慧音先生が述べてきたようなアレントの「私的」「公的」というもの、そして「社会的な

るもの」への関心は、『全体主義の起源』で述べたような全体主義及び大衆社会の広がりへの関心と明らかに陸続きになっている。教育思想で有名な小玉重夫（注1・31）氏は、現代の若年層の置かれていた状況を参照しつつ、アレントの『人間の条件』の役割を、人々が「忘却の穴」に落ち込んでしまわないような社会のあり方とその条件を考えることにより、現代において国家の成員としての身分を奪われた「難民」的な存在になる状況をいかに回避するか、という手がかりを提供しているとしている（注1・32）。多様な人々の様々な側面によって公共性が生まれるとするアレントの公共性に関する議論の現代的意義については、今一度見直されるべきものだろうな。

1.4 アレントにおける「労働」と「仕事」

魔理沙…さて慧音先生、次はアレントの示す「人間の条件」についての説明になるな。というわけで、よろしく頼むぜ。

慧音…ああ、わかった。…さて、先ほど私が解説した、アレントの「私的領域」「公的領域」そして「社会

的なるもの」についての説明の中で、何回か「行動力」という言葉が出てきたかと思います。アレントが『人間の条件』の中で示している概念として、「活動的生活」というものがあります。魔理沙が先ほど触れたように、アレントは『人間の条件』で、人間の活動について、「労働」「仕事」「活動」の3つを挙げています。この3つを「活動的生活」といい、これらの活動を支える条件について、アレントは次のように述べます。

労働 *work* とは、人間の肉体の生物学的過程に対応する活動力である。人間の肉体が自然に成長し、新陳代謝を行い、そして最後には朽ちてしまうこの過程は、労働によって生命過程の中で生み出され消費される生活の必要物に拘束されている。そこで、労働の人間的条件は生命それ自体である。

仕事 *task* とは、人間存在の非自然性に対応する活動力である。人間存在は、種の永遠に続く生命循環に盲目的に付き従うことはないし、人間が死すべき存在だという事実は、種の生命循環が永遠だということによって慰められるものでもない。仕事は、すべての自然環境と際立って異なる物の「人工的」世界を作り出す。その物の世界の境界線の内部で、それぞれ個々の生命は安住の地を見出すのであるが、他方、この世界そのものはそれら個々の生命を超えて永続するようにできている。そこで、仕事の人間的条件は世界性である。

活動 *action* とは、物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる唯一の活動力であり、多数性という人間の条件、すなわち、地球上に生き世界に住むのが一人の人間 *being* ではなく、多数

の人間 *being* であるという事実に対応している。（注1・34）

神子：「仕事」の条件で規定されているような永続性や、「活動」の条件にある人間の多数性は、まさにアレントが「公的領域」の特徴として説明していたことに繋がりますね。

慧音…アレントが「人間の条件」というのは、単に人間に生命が与えられる場合の条件を意味するだけではない。というのは、人間が条件づけられた存在であるという場合、それは、人間が接触するすべてのものがあたちに人間存在の条件に変わるという意味だからである（注1・35）と述べている通り、生物学的条件のみならず、人が他の人の生命に触れたりすることや、あるいは人が作り出したものも、人間の

- 注 1.26 アレント『人間の条件』pp.93-94、飯島「ハンナ・アレントと公的自由」p.66
 注 1.27 アレント『人間の条件』p.62
 注 1.28 アレント『人間の条件』p.64
 注 1.29 アレント『人間の条件』p.64
 注 1.30 アレント『人間の条件』p.98
 注 1.31 Kodama, Shigeo 1960- 東京大学大学院教育学研究科教授。専門は教育哲学、教育思想史など。著書に『シティズンシップの教育思想』『学力幻想』など。
 注 1.32 小玉『難民と市民の間で』p.38
 注 1.33 飯島「ハンナ・アレントと公的自由」p.78
 注 1.34 アレント『人間の条件』pp.19-20
 注 1.35 アレント『人間の条件』pp.21-22

条件をなすものとなります。

マミゾウ：先ほど先生が説明しておったアレントの「公的」「私的」概念や社会領域の話と結びつけて考えると、「人間の条件」というものは、生物学的なもの他に、社会的なものも多く含んでおり、特に「仕事」と「活動」はその傾向が強そうじゃない。そして、私的領域が社会領域として拡大すると、私的領域を規定していた生存や保存が前面に出てくることになるから、この3つの中で「労働」が先頭に出てくる、ということか？

慧音：マミゾウさんからちょうどいい話の振りがありましたので、ここからはアレントが規定する活動的生活の3つの要素について少し分け入って見ていきたいと思います。まずは「労働」からです。アレントは労働に関する近代の特徴として、「活動と観照の伝統的順位ばかりか《活動的生活》内部の伝統的ヒエラルキーさえ転倒させ、あらゆる価値の源泉として労働を賛美し、かつては《理性的動物》が占めていた地位に《労働する動物》を引き上げた」（注1・36）としています。アレントはそれ以前の労働と仕事について「わが肉体の労働とわが手の仕事」を区別する理論を近代は生み出さなかった代わりに、様々な分類を生み出したとしています。そのうちアレントが注目するのは「生産的労働」と「非生産的労働」の区別で、それ以外の区別はあまり意味をなさない、としているのです。

さとり：「それ以外の区別」というのは、例えば肉体労働と知的労働、熟練作業と非熟練作業というものになるようですね。

慧音：それでは労働というものが何かというと、あくまでも生命の過程の一つに過ぎない、ということになります。

ります。そして労働の生産物とは、《生命過程そのものに必要とされるもの》（注1・37）であり、それはたとい人工物であっても「世界性」を持たず、《絶えず循環する自然の運動に従って、生まれ、去り、生産され、消費される》（注1・38）ものです。そしてアレントはマルクス（注1・39）やロック（注1・40）を引き合いに出しつつ、消費もまた労働と密接に結びついているものであり、《この消費は、生命過程を再生しつつ、肉体をさらに維持するのに必要な新しい「労働力」を生産——むしろ再生産——する》（注1・41）ものとされます。

霖之助：しかし、ロックやマルクスの立場は、むしろそのような「労働」を礼賛するものではなかったか？

慧音：そうです。それ故、アレントが「人間の条件」の中で述べている「労働」に関する言及は、特にマルクスへの強い批判ということが表明されているのです（注1・42）。そのため、アレントの「労働」観は、特にマルクスに強く依拠しつつそれを批判するものと言えます（注1・43）。そして、人間が「社会化」された状況においては、蓄積された富を消費財として使い、個人的専有の限界をたやすく突破してしまします。アレントは「人間の条件」で「消費者社会」という概念を用いていますが、このような社会の到来も、政治からの解放ではなく、労働の優位性の実現によって達成した、となるのです（注1・44）。

針妙丸：アレントにとつての「労働」っていうのは、人間の生物としての側面によって特徴付けられるものであるため、それが有意になっちゃう、っていう状況は公的領域の喪失と強く関連づけられてる、ってことですね。「労働」が消費と結びついて、絶えず循環するようなものである、っていうことは、逆に

「仕事」っていうのは、何らかの人工物を生み出すのは同じであっても、世界に対して永続的なものをもたらすこと、ってことになりますね。

慧音：ああ、その通りだ。例えば作業のために未永く使われるような道具を開発することは、アレントの言うところの「仕事」ということになる。耐久性、永続性、世界性を持ったものが生み出されるからな。

《労働の努力をかなり和らげることでできる道具や器具そのものは、労働の産物ではなく、仕事の産物である。つまりそれは、消費の過程に属するものではなく、使用物の世界の中心にあるものである》（注1・45）とある通りだ。また、「労働」においても道具は重要だが、「仕事」においては道具の重要性はさらに増す。アレントは「労働」を行う主体を「労働する動物」、「仕事」を行う主体を「工作人」と読んでいるが、「工作人」や人工的世界の誕生は、道具の発見と時を同じにしている。

針妙丸：「公的領域」を特徴付けていた、世界性や永続性についての、「労働」と「仕事」を分ける時にも重要なキーになるんですね！

慧音：それではここからは「仕事」について見ていくことにしましょう。「労働」が自然としての人間の過程にあるのとは違い、「仕事」は自然を逸脱した行為と言えます。大きく4つの点について見ていくと、第一に、「仕事」の生産物には耐久性があることで、たとえ消費されることがあっても、「労働」の生産物のように消費そのものが目的とはならないことです。またこのことにより、「仕事」によって生み出されるものは世界の中の客観性を持つことになります。第二に、「仕事」は自然からの逸脱を意味し、その意味では「工作人」は自然に対しては

侵犯者、破壊者となることです。第三に、モデルがあることで、仕事の過程は「工作人」の外部にあるということ、そして第四に、明確な始点や終点を持つこと、「仕事」の過程が可逆的であること、すなわち人間の手で作りましたものは人間の手で破壊することも可能であり、結果として「工作人」は自己の行為についても支配者となり得る、ことです（注1・46）。ただ、「工作人」の行為及び道具については、ある道具が作られた瞬間にそれが次の道具を生み出すためのものとなるように、文脈によって目的と手段が容易に変わりうるということもあり、有用性という基準で考えると目的と手段の関係が無限に続いてしまふということが起こり得ます。

生産物は、それを生産したときに用いられた手段から見れば目的であり、製作過程の目的ではあるけれども、それが少なくとも使用対象物にとどまていない限り、いわばそれ自身目的となることはないからである。家具作りの目的である椅子は、その耐久性のおかげで安楽な手段として使用される物としてか、あるいは交換の手段としてしか、とにかくふたたび手段となることによつてのみその有益性を示すことができる。製作の活動力そのものに固有の有用性の標準につきまとう困難は、次の点にある。すなわち製作が依拠している手段と目的の関係は、すべての目的がある別の文脈ではふたたび手段となるような連鎖に大変似ているということである。いいかえると、厳密に功利主義的な世界では、すべての目的は、短期間のものであつて、必ずその先のある目的のための手段になってしまう。（注1・47）

注 1.36 アレント『人間の条件』p.138

注 1.37 アレント『人間の条件』p.151

注 1.38 アレント『人間の条件』p.151

注 1.39 カール・マルクス Karl Marx 1818-1883 哲学者、経済学者。資本主義を研究した『資本論』は後にマルクス経済学と言われる学派を生み出す。他の著書に『共産党宣言』（フリードリヒ・エンゲルスとの共著）『経済学批判』など。

注 1.40 ジョン・ロック John Locke 1632-1704 哲学者。『統治二論』で社会契約論や抵抗権を展開し名誉革命やアメリカ独立宣言に影響を与えた。他の著書に『人間悟性論』『教育論』など。

注 1.41 アレント『人間の条件』p.154

注 1.42 アレント『人間の条件』p.133

注 1.43 石井「ハンナ・アレントとマルクス」pp.123-124

注 1.44 アレント『人間の条件』pp.188-189、川崎『アレント』pp.274-275

注 1.45 アレント『人間の条件』p.181

注 1.46 アレント『人間の条件』pp.223-234、川崎『アレント』pp.276-277

注 1.47 アレント『人間の条件』p.245

注 1.48 アレント『人間の条件』pp.264-265

マニゾウ…そういった有用性の持つジレンマを克服したいのであれば、最適なのは、完全に主観的な立場に立って、自らが有用性を判断する最大の存在、いわば「究極の目的」となるという、人間中心主義的な視点が必要となるじやろう。しかしそうすると、あらゆるものがただの手段に墮し、固有の意味を失うのではないかと？ 果たしてアレントはそういうことを許すのか？

慧音…確かに有用性も大事ですが、アレントにとって、「世界」の最も重要な性質が永続性にあることは本節の冒頭でも申し上げたと思います。アレントは「日常生活の必要や欲求から最も縁遠い」存在として芸術作品を挙げています。確かに所謂芸術作品は有用が無用かと言われれば無用ではあるでしょう。しかし、永続性が高いため、それは優れて世界的と言え

ます（注1・48）。

慧之助…そうすると、有用性という価値判断は、確かに重要なものではあるが、それは世界を規定する最も重要な要素である永続性に対応する価値判断ではないということになるな。「世界」というものが永続性に支えられたものであり、また「仕事」による生産物も世界性、永続性が期待されている以上、「仕事」の生産物にはそれに対応する価値が求められるということになるのが。

慧音…アレントによると、それは美醜ということになります。そして、アレントが《普通の使用対象物は美のために作られたものではないし、また美のために作られるべきものでもない。にもかかわらず、とにかく形をもち、見られる物はすべて、美しいか、醜いか、その中間であるが、このいずれかにならざる